

虞美人・春花秋月何時了(李煜)

報告:花岡風子

今日のお題は李煜の〈詞¹⁾〉〔虞美人〕でした。〈詞²⁾〉は歌謡文芸の一つで、今も中国では多くの人々に親しまれています。宋代に特に栄えたので宋词とも言います。

何百種類もあるメロディーに合わせて作詞するもので、メロディーの一曲一曲に平仄など作詞法が細かく定められています。句の数や各句の字数もメロディーごとに定められています。したがって作品の長短もメロディーによって異なり、短いもので16字、長いものでは200字を越えます。作者は好みに応じてメロディーを選び、まるで替え歌を作るように歌詞を充てはめていきます。歌詞を充てはめるので〈填詞³⁾〉とも言います。

今回取り上げた作品は〔虞美人〕という名称のメロディーに、李煜が歌詞をつけたものです。数ある李煜の作品の中で最も有名なものの一つです。〔虞美人〕と言えば『史記』で有名な項羽の愛人を連想させますが、ここではメロディーの名称の一つで、作品の内容を表わすものではありません。メロディーの総称は、一般に〈詞牌⁴⁾〉と呼ばれています。

さて、作者の李煜は五代十国時代、今の江蘇省、江西省、福建省を中心に、三代にわたって地方政権(十国のうちの一つ)として栄えた南唐の最後の国

主でした。中国では李後主と呼ばれ、知らない人はいないくらい有名な人物です。その特異な生き様と文才は、長い中国の歴史の中でも、特に際立った存在です。

当時の南唐は長江の下流域に位置し、豊かな自然に恵まれ、経済面では最も栄えた地域でした。李煜はその恵まれた境遇を背景に、芸事にふけり、硯や紙などの高級文具や骨董品など美術工芸をこよなく愛し、多くの宮女たちに囲まれて耽美の世界に遊ぶ日々を過ごしていました。一方、政治能力は全くないというダメ君主でもありました。しかし、文人としての才能は卓越しており、詩や書画、音楽に通じていました。特にこの〈詞〉というジャンルにおいては他に並ぶ者がなく、今に伝わる作品は李白や杜甫に比べて、数こそおおくありませんが、不朽の名作として愛唱され続けています。

この李煜、生まれたのは937年7月7日、亡くなったのも978年7月7日……。[937年といえ、盧溝橋事件のちょうど千年前ですね。七夕の日でもあります。最後は諸説あるけれど、975年の暮れ、宋軍の侵入を受けて、首都南京から宋の都、汴梁⁵⁾に拉致され、2年半余りの軟禁生活の後、42歳の誕生日に毒殺されたというのが通説らし

虞美人

李煜

chūn huā qiū yuè hé shí liǎo
春花秋月何時了，
wǎng shì zhī duō shǎo
往事知多少。
xiǎo lóu zuó yè yòu dōng fēng
小楼昨夜又东风，
gù guó bù kān huí shǒu yuè míng zhōng
故国不堪回首月明中。
diāo lán yù qì yīng yóu zài
雕阑玉砌应犹在，
zhǐ shì zhū yán gǎi
只是朱颜改。
wèn jūn néng yǒu jǐ duō chóu
问君能有几多愁，
qià sì yī jiāng chūn shuǐ xiàng dōng liú
恰是一江春水向东流。

虞美人

李煜

春の花、秋の月、時は過ぎ逝き
もろもろ
諸々の遠き思いは果てしなく
ゆうべ
昨夜また、囚われの身に東風来る
あお
在りし日の都の空は、仰ぐに堪えず、月明かり
きんぎょく
金玉の館の後は、思うに昔と変わらねど
やつ
ただ窺れしは、この姿
いくばく
幾何の憂い有りやと人問わば
しゅんすい
東に流るる春水の、みなぎ
漲る如しと我は答えん

い。」と植田先生。

私の愛読書の陳舜臣著『小説 十八史略』にも「誕生日の祝いに」と出された酒に猛毒が盛ってあったとありました。『小説 十八史略』に描かれていた李煜の人生や作品は多分に芸術的でロマンチックなので何となく好意を抱いていましたが、中国でも李煜好きは特に女性に多いとのこと。テレサテンも、李煜の〈詞〉〔乌夜啼〕〔无言独上西楼……〕を現代風にアレンジして、素敵に歌っています。

「こんな男が側にいたら女性は大変だと思いますけどね～」と植田先生。「この作品も最後まで、敵国に軟禁された生活は耐えられないと言いながら、昔は良かった、と思い出に浸って、自分の憂いをひたすら美しく歌い上げていますね。グチも李煜の詩才にかかると芸術になってしまいます。自国が戦いに敗れて悔しいとか、人民はその後どうなったかななどの言葉は一切出てきません。ひたすら、やつれ果てた自分の姿をいとおしみ、昔の自分はイケメン（紅顔）だったなどとグチっています。ことほど左様に、社会性の欠如したナルシストの典型なのですが、それとわかりながらも、読者は、哀愁を帯びた華麗な作品世界に引きずり込まれてしまいます。女性には特に人気がありますね～」。

なるほど、国を滅ぼした芸術家のナル男くんはそれでも、最期まで美の中で自己陶醉していられたということですね。確かに政治的にも社会的にも困った君主ですが、それはそれで素晴らしいと言わざるを得ません。父の中主李璟りけいと共に、その作品は《南唐二主詞》に収められ、中国では超有名な詩人として千年以上の歴史にその名を刻んでいるわけですから。

ひと通りの人物紹介の後、この詩の情景を想像しながら、参加者全員で繰り返し朗読練習をし、中国語の響きに浸りました。

その後だいたいこんなメロディーだったろうということで、残された譜面をもとに、植田先生が歌ってくださいました。5音階の、哀調を帯びた、気品のある繊細な曲のように感じました。

もともと〈詞〉とは宮廷の妓女たちが歌や踊りを

権力者に提供したもので、女性らしい繊細さが特徴なのだそうです。その後、時代が下って、宋の蘇軾そしやく（蘇東坡）が三国志の歴史を歌い込んだ男性的な〈詞〉を作りました。メロディー、即ち〈詞牌〉の名は〔念奴嬌ねんぬきょう〕といます。その内容は、本来の女性的な「婉約派えんやく」に対して「豪放派」と呼ばれるそうです。

メロディーそのものは時代とともに次第に廃れていきましたが、〈詞牌〉と、その〈詞牌〉ごとに定められた作詞法は後世にも受け継がれ、今も愛好者が絶えません。毛沢東もこのジャンルが得意で、革命を〈詞〉に歌い込んでいます。

最後にまた皆で李煜の人生について語り合いました。「囚われの身で三年近く幽閉され、42歳で亡くなったわけですから、生涯青春だったかもしれませぬね」。ポツリと仰った植田先生の言葉が妙に腑に落ちました。

何時までも若いつもりでいる今の私も、いつの間にか李煜の年齢を越えてしまいました。時々十代の頃の自分を思い出すと、その頃の感覚はまだ新鮮に思い出せるのに、あれから30年も経って、どうあがいてもオバサンの域にはまり込んだ自分に違和感や驚きすら感じる私……。

李煜は皇子として、生まれた時から宮廷でチャホヤされて育ち、やれ芸術だ、美女だ、音楽だ、という生活を40手前まで送ったのですから、正に生涯青春の思い出しかなく、寂しい幽閉生活で自分の精神を保つには、昔の思い出に浸る他はなかったのではないのでしょうか？

ということで、ある意味やっかいなナル男とわかっていても最後はやっぱり同情してしまった自分に苦笑です。何処と無く太宰治好きを彷彿させる李煜ファン。結構多いそうですよ。

■注

- 1) 詞（ツ）：日本語の読みでは〈詞〉は詩（し）と同音であるため、区別しやすく中国語音から（ツ）と呼ばれることがある。
- 2) 汴梁べんりょう：現在の河南省開封市。古く大梁、汴京、東京とも称し、中原の政治、経済、文化の中心として、五代の4王朝と北宋の首都であった。